

なざる不満は、所詮不満としてとどまり、乱後におけるたたかいの前進・生長の意義は過少評価されることになるのではなからうか。

このことは、行基論をめぐる上層農民の問題とも関連している。「いわゆる浮浪のなかに得度を求める上層農民の子弟がふえ」（一〇四頁）「王臣の力をかりて資人となり、また得度の便をもとめ、ありていにいえば、かれらは課役をのがれ、その上に何らかの特権にありつこうとして」（二五四頁）行基らのもとに集うのだが、この時、中・下戸の民衆たちは、いつたいどのように行基運動の中に位置づけられていたのか。慶雲—和銅、養老—天平と階級分化の進行にともなう等外戸や下戸の増大を考える時、こうした上層農民とかれらはどのように提携したのか、限られた史料ではあるが、私的土地所有の拡大と結合ということばの意味を、もつと発掘してゆく必要があり、初期庄園の萌芽の問題を併せて今後追究してゆく必要がある。これまでの「古代家族」とか「共同体」というあいまいな概念をさけて、問題をほり下げられた著者の叙述に、なお民衆がうかんでこないといわれる

とするならば、それは中・下戸から下層農民の歴史的発展とたたかいへの参加の実相についてであらうか。いまましこうした点が明かにせられうるならば、大仏造立を矛盾の相としてとらえるしごとが、もつとリアルに描かれるのではなからうか。ともあれ、万葉年代を近江遷都後の一世紀間に求められた著者の卓見は、今後なお多くの検討をへて、発展的に継受されねばならぬと考えるが、最後に二つの疑問点を記しておきたい。その一は、慶雲期のにおける崩壊の様相が、藤原宮の末期の社会的矛盾として、既に人麿の詠歌に反映されているとされるが、（七四頁）その歴史事情はも少しディテールに描かれる必要がないかということ、他の一は養老律令の完成—貴族社会とはいふもの、一応律令体制の修補、維持がなされてゆくプロセスと関連して、皇親政治を支柱とするディスポティズムのあり方と、律令体制とよばれる歴史的内容とは一応きりはなして考慮する必要があるのではないかという素朴な疑問である。

著者の論述が、三—六世紀の見透しいうえにたてられながら、なお公に所論の展開をみ

なかつたことと、本書の性質上是非収録してはしかつた「白鳳の宮廷詩人」（万葉七）の劳作が、のらなかつたことを、本書のために惜しむもの一人であるが、第三論集の刊行と英雄時代論の具体的論究を、いま強く切望する。ひごろ著者の学恩をうけるものとして、二・三の疑問点をのべて御示教を仰ぐ次第であるが、筆者の浅学の故に、論点を誤解した点があるならば、御寛恕を願いたい。

——上田正昭——

W. F. Le Gros Clark

: History of the Primates (1949)

British Museum (Natural History) 発行の同博物館地質学部案内書のひとつである本書は、化石人類研究の入門書としてもすぐれている。著者は本書の前半で読者に問題の理解に必要な基礎的知識を与えようとする。動物界分類とその進化論的意義、自然淘汰、人類の進化の過程、それを証拠づける化石資料、化石を使つて行う議論に必要な地質年代、等につき説明し、古生物学者が化石した

骨や歯を以て如何に絶滅した型を再現して比較研究に資し、人類發展の経過を証明するかに就いて平明に解説する。かくて、はじめて靈長目に關する問題をとりあげる。ホモサピエンスに到達する迄のさまざまな段階と傍系をあとづけ、各種の化石人類と化石猿類に就いて詳しく述べる。「アフリカ発見のオーストラピテクス」に關する一節、「洪積期とホモサピエンスの起源」と題する文章は特に興味深い。人類進歩の全史は、すべて頭腦の

素晴らしい發展に負う。人類の頭腦は他の動物群を尻目に急速に而も複雑に發達しそれが人体の、他の部分を精妙なものとする結果を生み、すべての動物群を圧倒したのである。著者はこの経過を指摘すると共に、最後に人類は彼の頭腦の發達に進歩のエネルギーを集中したからこそ、他の動物群に智能の上で優越し得たのだから、今や人類知互の間に秩序を保つて生活してゆくことを保証せねばならぬと強調する。若しこの事に失敗したら、他の動物が或る特定の身体的メカニズムが膨大な發達をとげながらそれによつて亡びてしまつた多くの例が示す如くに、人類もまた絶滅する

だろうと云う意味の警告を以て結尾としている。卷末に參考すべき文獻目録を添えて、いから、更に専門の研究に入ろうとする者にとつて好個の指針となる。同じシリーズの Dr. K. P. Oakley 著 *Man the Tool-Maker* と併せ読むことを奨めたい。(一二頁価 25g)

Frederick Johnson

: Radiocarbon Dating (1951)

アメリカ考古学協会 (Society for American Archeology) 紀要第八冊である。此の冊子は放射性炭素 (C^{14}) による年代測定法に関心を持つすべての考古学者、地質学者、植物学者にとつて、必携の文獻である。植物も動物も共に生命のある限り大氣中から二酸化炭素を吸収しつづけ通常の炭素に對し恒に同じ比率の放射性炭素を含有している。地球上の動植物はすべて一方では体内の組織中の放射性炭素を恒に解消しつづけていると同時に他方では新しい放射性炭素を大氣中から摂取するからである。この更新は組織が生きている限り継続するが、一旦生命が絶えたと大

氣中の炭素の吸収はとまり、自然分解に因つて放射性炭素の分量は漸次減退する。その放射性炭素減退の速度は、どこでも、いかなる生物でも一定しているのも、もと生物であつた遺物に残っている放射性炭素の量を計測すれば、該遺物の素材であつたものと生物が、何年前に生命が絶えたかを知ることが出来る。これがこの年代法の基礎の理論である。実際には量を測るのではなくて、分解の速度を測るのであつて、計測は却々困難であるが、精緻な実験操作によつて成功している。

本書の序文において編者 Frederick Johnson 博士は、この年代法の發達をあとづける。そして計算の結果疑わしい年数が出て、その殆んどすべては、實驗室での過誤ではなくて、資料出土の地点における考古学者や地質学者の不正確な觀察に由來することを指摘し特に他の遺物や地質学的堆積物との層序的關係を明確にする事を要求している。当然のこ

と乍ら注意せねばならぬ点である。次に本書には二百点以上の資料に就いてこの年代法を案出した W. F. Libby 博士等による計測の結果の發表が載せてある。博士はシ